
可愛いうさぎちゃん

泉夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

可愛いうさぎちゃん

【Nコード】

N6265Y

【作者名】

泉夏

【あらすじ】

異世界にやってきたうさぎちゃんと飼い主のお話。

私の朝は早い。

まず自分の身支度をすませ、軽く朝ご飯を食べる。

次にお仕える主の用意。

ゆっくり寝ていればいいものを、妙に早起きだから困る。

「うさぎ、なにをぐずぐずしているんです。さつさと準備なさい。」

「はい、申し訳ございません！！すぐに参ります！！」

ああ、今日はもう起きてるよ。

しかも機嫌が悪いらしい。

やだなあ、八つ当たりされたら。

ここはブランミュール王国。

そう、日本ではない。

もつという地球でもない。

何故こうなったかさっぱりわからない。

ちなみに私は“うさぎ”ではなく人間だし、そついう名前でもない。
ではどうしてそう呼ばれているかというと…

真っ白で長いふかふか耳。

お尻にも真っ白なふわふわしっぽ。

ただしこれは本物ではない。

人間なのだから当たり前だ。

所謂バニーガールという恰好である。

私の名前は佐伯結依、25歳。
しがない派遣社員だった。

給料なんて微々たるものだったので、夜のお仕事もしていた。
その仕事着がコレである。

バーニガールの恰好をした女の子がお客様と楽しくお酒を飲みながらお話する。

お触りはなし、ということになっていたが、そこは・・・ねえ。

まあ、私はそんな輩にはかるーく制裁を加えていたが。

あの日は休憩中にふとゴミ袋が目についたため、ちよつと外まで捨てに行こうかと思っただけだ。

ちよつと外の空気も吸いたかったし、ついでとばかりに。
何がいけなかったの？ねえ、神様よお。

少し重いゴミ袋を一旦床に置き、ドアを開ける。

外にある重石でドアを固定しておこうと外に出た、が、あら？
あら？

目の前は薄暗い路地裏ではなく、木で緑がいっぱいだ。

ピンヒールのかかところが気持ち埋まっている気がするのは気のせいではないようだ。

だってコンクリートではなく、土。

「え。」

自分の目を疑って、とりあえず後ろを振り返ってみたが、そこにはあるはずのドアがなかった。

「・・・。」

私はしばらく呆然としていたと思う。

なにがなんだかわからない。

しかもこんな恰好だし。

周りを見渡すが、木、木、木。

森？いや、森に行ったことがないからわかんないけど。とりあえず、どこかに続く道はあるようだ。

現に私がいる場所もちょうどその道の上。

これが本当に木々の中に放り出されていたら大変だったろう。

さて、このままここにずっといるわけにはいかないのだが・・・。

「右に進むか左に進むか、だよね。」

これってけっこう重要な気がする。

残念なことに都合よく看板が立っているわけでもない。

「うーん。ここはアレを使うべき？」

端によつて小枝を拾い、地面に垂直になるように指で先を支える。指を離して倒れた方に進むというアレである。

「でもこれ道じゃない方に倒れちゃったらダメだよー。」

危惧した通り、中々思う二方向に倒れてくれない。

そんな傍から見たらくだらないことを夢中でやっていたため、近づいた気配に気付かなかった。

相当キテたんだと思う、私。

「何をしていますのです。」

「わあっ！！」

突然後ろから声をかけられ非常に驚いた。

ビクーっ と体を震わせると、不安定な体勢でしゃがんでいたため、尻餅をついてしまった。

しかもお尻には尻尾が付いていて、変に厚みがあり余計に痛かった。

「ったあー。」

「おや、大丈夫ですか。それにしても色気がないですね。きゃーと言えないのですか。」

きゃーなんて言えるか、っーか本気でびびったら可愛げのある声なんて出ないと思う。

「もっ、なに？」

体勢を崩したまま仰け反つてみると、男が立っていた。
「何をしているのかと聞いたのですよ、うさぎさん。」
「は。」

本日二度目の呆然。

どう見ても日本人ではないし、容姿も恰好も変だ。
いや、私も恰好は変だがそれはこの際措いておく。

銀の長髪に紫の瞳。

黒いロープ？マント？から覗く服は白のゆったりとしたワンピース？
それはそれは綺麗は男だった。

これは一体……。

「困ったうさぎですね。」

そのままの体勢で動かなくなった私に呆れると、ふわりと持ち上げて立たせようとした。

「え、あ。す、すみません。」

が、ヒールでよろめいてしまい、後ろにいる男に寄り掛かってしま
う。

「どうやらこの耳は偽りのようですね。ということはこの尻尾も。」

「え、当然でしょ、おっ!？」

「うん、肌触りがあまりよくない。」

私の頭に付いている耳をふにふにと触っていたかと思うと、正面を
向かされ、尻尾を含むお尻を撫で始めた。

なにこの人ー!!

抵抗して放れようとするが、腕をがっちり回され身動きがとれない。

「ちょっと！やだ放して!!」

男女の力の差か、びくもしない。

無駄が嫌いな私は早々に諦め、大きなため息を吐く。

落ち着け、なんだか怪しいが人に会えた。

とりあえずこの人に頼るべきだ・・・よね？

会社や店のいやーなおっさんに比べたら全然ましじゃないか。
やっтерことはアウトだが、顔がセーフだ！

我慢だ私！と自分に言い聞かせた。

そんな様子を見ていた男は、身を屈めたかと思うと私の本当の耳に
そつと息を吹きかけた。

「ひゃあっ！」

思わず出た声に恥ずかしく思い、近くなつた男の顔をきつと睨みつ
ける。

すると男はにつこり笑って言った。

「出るじゃないですか、いい声が。」

「狭い所ですが、どうぞ。」

「・・・邪魔しま、す。」

「おや。大丈夫ですか、なんて聞くまでもなさそうですね。このまま抱えますよ。」

「うう・・・。」

男の名前はアルジャンといった。

横文字が苦手な私は、長つたらしい名前を覚えることは無理なので、家名は早々に放棄し覚えていない。

とりあえず、話を聞くにしてもこんな森の中にいても仕方がないということ、彼の家に招かれた。

なんと驚いたことに、彼は魔術師だというのだ。

魔術師、ということは魔法が存在するのである。

初めは、何言っただよと彼を変な目で見てしまったが、私がこんな所にいる時点でそれもありなのかもしれないとぼんやり思った。つい今しがた、その魔法とやらでこの場所にやって来たのだ。

あの場所からこの家まで歩いて2〜3時間は優にかかる距離らしい。なにこの便利さ。とは思ったが、どうも体がソウイウモノに慣れていないようで気持ちが悪い。

あれだ、乗り物酔いみたいな感じだ。

そんなグロッキーな状態の私を本当に心配しているかは疑問だが、アルジャンは私を抱えベッドに寝かせてくれた。

「こんなことぐらいで気分が悪くなるとは。詳しい話は後にしましょう。とりあえず休んでなさい。」

彼は私の頭をポンと軽くたたくと、そのまま部屋を出て行ってしま

った。

ふかふかで肌にとても馴染む寝具に包まれていると、安心したせいか涙がぼろりとこぼれた。

「・・・あれ。」

気付くと次々と溢れてくる。

「っっ、うう。」

おかしな所にくるわ、魔術師に会うわ、気持ち悪いわで一気に頭がぐちゃぐちゃになった。

誰もいないのいいことに私はわんわん泣いたのである。

だから扉の向こうにアルジャンがいたなんて気づきもしなかった。

「せっかく水を持ってきたのですが、これでは入らない方がいいでしょうねえ。」

手元の盆には水の入ったピッチャーとグラス、そして濡れタオル。

泣き声は弱まる様子を見せない。

時々罵声らしきものも聞こえてきて、ため息が出る。

「やはり色気がない。・・・まあ、しばらくそっとしておきますか。」

「

いつの間にか泣き疲れて眠っていたらしい。

起き上がると、タオルが枕元に落ちていた。

ナイトテーブルには水。

アルジャンが置いて行ってくれたのだろう。

寝たおかげで気分は良くなったが、喉がカラカラだ。

あれだけ泣いたのに、目蓋があまり重く感じないのは、タオルのおかげのようだ。

有難く思い、水も一気に飲み干す。

「ふう。おいしい。」

落ち着いたところで、辺りを見回すと、すっかり夜だ。カーテンが開けられていたため、月明かりで部屋はそこまで暗くはない。

とりあえずこの部屋から出ようとした時に、いきなり扉が開いたのでビックリした。

「ようやく起きましたか。寝すぎですよ。」

どうやら起きたことに気づいていたらしい。

というか、心臓に悪いからノックくらいして欲しかった。

部屋を出ると、そこはリビングルームのような所だった。

テーブルに椅子は二脚だけ。

すぐそこにはキッチンも見える。

「ここにはあまり人が来ないのでたいしたものは出せませんが。」

そう言つて、カップを差し出した。

中身の液体は黒い。

なんだコレは、・・・コーヒー？

それにしてもちよつとドロつとしてないか？ココア？

変なものは出さないだろうとは思いつつも、アルジャンを見てしまふ。

「なんです、その顔は。」

「ええと、これはなんという飲み物でしょうか。」

「はあ？・・・本気で聞いているのですか？」

「本気です、大真面目です。」

しばし沈黙。

彼は訝しんでいた顔を憐れむような顔に変化させた。

なんかすごくムカつく。

「これは又ワグレ又という飲み物です。苦味がありますが、美味しいですよ。」

「又、又ワ？」

「ヌワグレヌ。」

「ヌワグレヌ……。言いにくいなあ。」

くんくんと匂いをかぐと、コーヒーに似た香りがする。

美味しいという言葉を感じて、恐る恐る口に含む。

「あ、コーヒーだ。」

「コーヒー？君がいた所ではそう呼ぶのですか？」

「全く同じものとは言えないですが、香りと味はほぼ同じですね。」

「……。コーヒー……。」

そう呟いたきり、アルジャンは黙ってしまった。

何かを考えているようで、私も黙るしかなく、大人しくヌワグレヌをちびちびと飲んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6265y/>

可愛いうさぎちゃん

2011年11月24日20時46分発行